

Title	率先垂範の人：吉田城先生の思い出 (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出)
Author(s)	松澤, 和宏
Citation	仏文研究 (2006), S: 380-381
Issue Date	2006-06-20
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138037
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

率先垂範の人——吉田城先生の思い出

松 澤 和 宏 Kazuhiro MATSUZAWA

吉田城先生は54歳で道半ばにして病に倒れた。吉田先生はさぞかし無念の思いであったことだろう。しかしその業績の質と量の尋常ならざることを思うとき、また人間はすべて果そうとして果しえない思いを抱いたまま死んでいく宿命にあるのだとすれば、研究者としても教育者としても天寿を全うされたようにも思えてくる。それほど吉田先生はエネルギーで、つねに求心的な側面と遠心的な側面を併せ持っていた希有な研究者であった。吉田先生はブルースト研究者として世界的な評価をうけていたにもかかわらず、ブルースト以外の作家にも旺盛な関心を向け、近年は芥川の草稿研究にもかなり傾倒されていた。

わたしが初めてお目にかかったのは、記憶を辿ると、留学中のパリのことであり、1983年頃ではなかったかと思う。吉田先生とお話をさせていただいている間に、自分の心がなごみ、明るくなった留学生はわたし一人ではないだろう。吉田先生は軽妙洒脱な都会人としてさりげなく他人につねに配慮され、彼のいるところには自然と若手が慕って集まり、そこからはいつも明るい雰囲気醸し出されていた。わたしもそのなかの一人であった。わたしがお会いした頃は吉田先生にとってもプレイヤード版の編集というやりがいのあるお仕事を開始された充実の時期であったと思う。パリのリシュリュー通りの国立図書館の草稿閲覧室で多忙を極めていた吉田先生の姿が今でも思い浮かぶ。昼食に気さくに誘っていただき、多彩多様なお話をうかがえた。お話しているうちに「吉田先生」をいつの間にか「城さん」などと呼んでいる自分に後で気がつくことが多かった。

吉田先生は率先垂範の人であった。自分の論文生産しか念頭にない視野狭窄的なエゴイスト、哲学者オルテガが「大衆」と呼んだタイプの専門家とは正反対であった。ノブレス・オブリージュを自明のここのように実践し、疾病を抱えていてもつねに前向きに人を鼓舞し様々なシンポジウムや研究会を組織し、他の研究者とともに前進していくことに喜びを見出す人であった。1998年12月には名古屋大学でのフローベールのシンポジウムに積極的に協力していただき、1999年の京都大学でのシンポジウムにも誘っていただいた。またEquinoxe16号（1999年春）では生成批評の特集号を編者としてお手伝いできたこと、2003年には日本近代文学会で講演された後、国文学の研究者とユーモ

アをまじえながら意見交換されていた吉田先生の笑顔が懐かしく思い出されてくる。吉田先生の遺志を引き継いで、研究の成果を共に分かち合う喜びを大切にしていきたいと思う。

最後に、吉田城先生の御冥福を心から祈念して筆を擱きたい。

(まつざわ・かずひろ 名古屋大学文学研究科教授)